

長崎県 Nagasaki Pref. (肥前 Hizen)



長崎市稲佐山の山頂展望台から

長崎県では、お膝元の島原半島から“[360度の雲仙岳](#)”が眺望できるのはもちろんのこと、有明海や橘湾の沿岸部、多良岳や野母半島など、中南部の各地から“[南西面～北西面の雲仙岳](#)”が眺望できます。空気が澄んだ日には、大村湾の長崎空港から、さらには奥の西海橋から、大村湾越しに雲仙岳が眺められます。島原半島の3市に加え、諫早市や長崎市においても、雲仙岳が小中学校の校歌に登場し、地域で古くから親しまれてきたことが分かります。また、諫早市からは阿蘇山も眺望できることがあり、阿蘇山と雲仙岳の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

長崎県は、雲仙岳を通して九州各地とつながっています。例えば、佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、弥生時代の建物配置の中心線が雲仙岳に向かっていています。熊本県では、熊本市最古の健軍神社の1kmを超える参道は、まっすぐ雲仙岳に向かっていています。また、雲仙岳の山岳宗教は、701年に僧・行基によって開かれたとされますが、行基は初め、天草方面(熊本県)から雲仙岳を眺望し、“あそこで修行をしよう”と決意して島原半島に向かったと言われています。

その後、中世の時代には島原・天草両地域でキリスト教の布教が進み、キリシタン大名のもと、南蛮貿易で繁栄しましたが、豊臣秀吉・徳川家康によるキリスト教禁教以降、領主の交代も相まって、厳しい信徒弾圧や過酷な徴税によって領民の不満が高まって行き、有名な“島原・天草一揆”へと突き進みました。両地域で一斉蜂起した一揆軍は、やがて雲仙岳南麓の原城に集結し、籠城して善戦するも、12万人の幕府軍の前に敗れ、一揆軍約37000人はほぼ全滅しました。これにより、両地域の一部には史上空前の“無人地帯”が発生し、幕府は九州諸藩から住民を集めたため、両地域には九州各地からの多様な文化がモザイク状に分布する独特の風土が形成されました。

幕末の頃、勝海舟・坂本龍馬の一行が江戸から長崎に出張した際には、瀬戸内海から大分に上陸して豊後街道を通り、熊本から有明海を渡って雲仙岳山麓の街道を通り、諫早を通過して長崎に到達したとされています。この大分から長崎に至る別ルートとして、現在では国道57号線が通っていますが、この国道は、もともと阿蘇くじゅう国立公園と雲仙天草国立公園をつなぐルートとして、別府観光の父・油屋熊八氏が提案した九州横断道路(別府市～くじゅう～阿蘇カルデラ～熊本市～雲仙～長崎市)の一部となっています。

長崎県の東端には有明海が広がり、有明海の干潟は全国一の規模を誇っていますが、その泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を筑後川や白川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、雲仙岳そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

上記のようなストーリーを楽しめる散策道として、九州全県をつないで一周するトレイル“九州自然歩道”があり、県内では佐世保市～西海市～長崎市～諫早市～島原半島を通り、トレイルの各所から雲仙岳の姿を楽しむことができます。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、長崎県内を旅してみませんか？